

## サモア初訪問記

——サモアで中国とアジアの影響をみる

河合 洋尚

私は大学学部時代に社会学を専攻していたが、フィールドワークに関心をもち、学部の枠を超えて文化人類学、民俗学、人文地理学などの関連科目を受講した。そのなかで人文地理学の講義を担当されていた教員の一人が、サモア独立国（以下、サモア）で長年フィールドワークを続けてこられた杉本尚次先生であった。杉本先生は授業でサモアをとりあげることが多く、私はサモアに関する本を読むなどして、サモアについてのイメージを膨らませていた。だが、当時の私が抱いていたサモアのイメージはポリネシア系のサモア人が集まるのどかな島であり、そこにアジアという要素はほとんど介在していなかった。

詳しい経緯は省くが、私はその後、大学院で社会人類学を専攻し、中国研究者としての道を進んでいくことになった。博士課程進学後は中国広東省で長期のフィールドワークをおこない、2010年代に入ると、中国広東省から移住した人々を追い、環太平洋エリアでフィールドワークを繰り返すようになった。オセアニア島嶼部では、華人人口が相対的に多いフィジーとタヒチ、そしてニューカレドニア、バヌアツを訪れた。

2023年3月、新型コロナウイルスの感染拡大が徐々に収まりをみせたこともあり、私はフィジーを再訪することにした。だが、渡航計画を立てていく段階で、サモアが気になりはじめた。サモアの中国系移民をめぐる英語の本が1冊 [Tom 1986]、中国語の本が1冊 [翟2003] 刊行されていたからである。不思議なことに、サモアは、オセアニア島嶼部の中国系移民研究のなかでは、フィジーやタヒチに次ぐほどの蓄積量がある。なぜサモアなのか。私は、学部時代に抱いていたイメージとの違いに興味を覚え、2～3日という短い時間であったが、フィジー経由でサモアに旅立った。

目下、サモアの中国系移民をめぐる研究は、1980年代までに移住した旧移民を中心としている。しかも旧移民の多くは、すでに中国へ戻ったようである。先行研究では、中国の対外開放政策が軌道に乗った1980年代以降の、特に21世紀以降の様相があまり描かれていない。では現在、サモアにはどれくらいの中国系移民がいて、現地でどれほどの影響力をもっているのか。その一端でも垣間見ることができればと思い、私は現地を歩いた。

サモアの首都・アピアの街をひと通りまわると、漢字の看板を掲げたレストラン、雑貨店、

法律事務所などをいくつか見つけることができた。特に、アピアの中心部には時計台があるが、その近くに「陳茂公司」と漢字で表記された大きなスーパーマーケットがあることは印象的だった（写真 1）。また、広東語で話すアジア系の人々もしばしばみかけた。ただし、アピアでみられる漢字はバヌアツほど多くはなかったし、フィジー、タヒチ、バヌアツに比べると中国系住民の影響は大きくなさそうだというのが、最初の印象であった。



写真 1 アピアの中心部。左の建物が陳茂公司（2023 年 3 月、筆者撮影）

だが、現地の人々から話を聞くにつれ、その印象は一変した。陳茂や Leung Wai のように明らかに中国系と分かる店舗だけでなく、Bluebird, Frankie's Supermarket and Wholesale, Alan Wholesale など、一見してそれと分からないサモアの大手の雑貨店やスーパーマーケットが、軒並み中国人経営であることを知ったからである。これらの企業の創始者は、大多数が 1970 年代以前に移住した旧移民である。つまり、半世紀以上にわたって、中国系移民がサモアの経済に一定の影響を与えてきたことになる。経済だけではない。サモア人の家庭料理となっている *lialia*, *keke pua'a*, *sapasui* は、それぞれ中国料理である麺、

又焼包（チャーシュー饅）、雑碎（チャプソイ）をルーツとしているという。

サモアは、2010年から2020年にかけて中国と農業技術協力のプロジェクトを結んだこともあり、2010年頃からは新移民も増加していた。サモアの空港からアピア中心街に行くまでの道路の両側には——一見したところそうはみえないが——中国人経営の小さな店舗が多く立ち並んでいることを知った。

ある40歳代のサモア人男性によると、アメリカ領サモアの方では、韓国系と中国系と日系の企業がアメリカ・ドルを得るためにしのぎを削っている。そのため、中国系の新移民がアメリカ領サモアで成功することは難しく、まだ商売する余地があるサモア（サモア独立国、旧西サモア）の方に流れてきているのだという。

以上の真偽は今後確かめていく必要があるが、それしても私が見聞したサモアは——オセアニア民族誌でよくみられる——オーストロネシア系先住民と西洋人のせめぎ合いという枠組みに収まりきらないものであった。この男性の話聞きながらふと外をみると、サモアの村の外れにあるとは思えない日本語の車（写真2）が目にとまった。



写真2 サモア西北部のはずれにあった自動車（2023年3月、筆者撮影）

#### 参照文献

翟興付 2003 『薩摩巫華僑華人今昔』 香港社会科学出版社。

Tom, Nancy Y.W. 1986 *The Chinese in Western Samoa, 1875-1985: The Dragon Came*

*from Afar*. Western Samoa Historical and Cultural Trust.

(かわい・ひろなお 東京都立大学)